

2017年1月11日

博士学位審査 論文審査報告書（課程内）

大学名 早稲田大学
研究科名 大学院人間科学研究科
申請者氏名 佐藤 友哉
学位の種類 博士（人間科学）
論文題目（和文） 全般性の社交不安に対する関係フレーム理論からの再理解と認知行動療法的援助方法の検討
論文題目（英文） Re-understanding generalized social anxiety and examining a cognitive behavioral intervention based on Relational Frame Theory

公開審査会

実施年月日・時間 2016年12月5日・11:00-12:00
実施場所 早稲田大学 所沢キャンパス 100号館 第一会議室

論文審査委員

| | 所属・職位 | 氏名 | 学位（分野） | 学位取得大学 | 専門分野 |
|----|------------|-------|-----------|---------|-------|
| 主査 | 早稲田大学・教授 | 嶋田 洋徳 | 博士（人間科学） | 早稲田大学 | 臨床心理学 |
| 副査 | 早稲田大学・教授 | 熊野 宏昭 | 博士（医学） | 東京大学 | 臨床心理学 |
| 副査 | 早稲田大学・教授 | 鈴木 伸一 | 博士（人間科学） | 早稲田大学 | 臨床心理学 |
| 副査 | 早稲田大学・准教授 | 大月 友 | 博士（臨床心理学） | 広島国際大学 | 臨床心理学 |
| 副査 | 東北学院大学・准教授 | 金井 嘉宏 | 博士（臨床心理学） | 北海道医療大学 | 臨床心理学 |

論文審査委員会は、佐藤友哉氏による博士学位論文「全般性の社交不安に対する関係フレーム理論からの再理解と認知行動療法的援助方法の検討」について公開審査会を開催し、以下の結論を得たので報告する。

公開審査会では、まず申請者から博士学位論文について30分間の発表があった。

1 公開審査会における質疑応答の概要

申請者の発表に引き続き、以下の質疑応答があった。

- 1.1 **コメント：**中間報告会以降、丁寧な修正がなされており、最終的な論文は、明快な論文構成となった。プレゼンテーションも概ね明快であった。また、これまで長期間にわたる実験的研究データを積み上げてきており、この点は評価に値する。
- 1.2 **質問：**本研究で用いられているGo/No-go Association Task (GNAT) が「関係ネットワーク間の関係づけやすさ」を評価しているということであるが、認知的再体制化で

ターゲットとされる「言語刺激間の単なる結びつき」との差異はどこにあるか。

回答：GNATで測定される「関係ネットワーク間の関係づけやすさ」は、認知的再体制化でターゲットとされる言語刺激間の「直接的な結びつきの強さ」に加えて、言語刺激が「行動に及ぼす機能」を含むという前提を有していることが差異である。

- 1.3 **質問：**本研究では、臨床場面で観察されるいわゆる「頭の固さ」のような、思考に対する「全般的な認知的フュージョンの起こしやすさ」がどのように扱われているかが不明瞭であるという点に関しては、どのように考えているか。

回答：本研究では、「全般的な認知的フュージョンの起こしやすさ」を測定するために、介入においてターゲットとされるような苦痛度の高い言語刺激（たとえば、ふあん（不安））のみならず、直接的に介入を行なわないような苦痛度の低い言語刺激（たとえば、はな（花））に対する機能を測定するという意図を持っていた。

- 1.4 **質問：**本研究は、二要因理論を対抗仮説として、関係フレーム理論を追加していくことの重要性を論じる形で構成されている。二要因理論以後提唱された情報処理理論の考慮が不十分であるように感じられるが、この点を踏まえると関係フレーム理論を導入する必然性はどこにあるのか。

回答：情報処理理論の立場に基づけば、「刺激と反応の“間”に介在する認知的処理」を変容することを目的とした介入技法（たとえば、認知的再体制化）が提案される一方で、関係フレーム理論の立場に基づけば、認知（言語）を刺激のひとつととらえ、「刺激と反応の枠組み」というシンプルな図式のみで節約的にとらえることが可能である。したがって、認知が行動に及ぼす「機能」を直接的に変容する介入技法を新たに立案できる点に関係フレーム理論を導入する利点があると考えられる。

- 1.5 **質問：**本研究では、脱フュージョン（言語が行動に及ぼす機能が減弱している状態を指す）を目的とした介入技法である「Word Repeating Technique (WRT)」を、エクスポージャーに加えて実施することの増分効果を検討している。その際、エクスポージャーのみを実施する群の中で、脱フュージョンが生起している者を除外する手続きを用いている。しかしながら、当該の手続きはエクスポージャーによる消去が十分に起きなかった者のみを残したということにはならないか。

回答：本研究では、先行研究の知見にしたがって、エクスポージャーの効果は揺るがないという前提を有している。したがって、必ずしも消去が十分に起きなかった者が存在するという前提をもっていない。しかし、本研究の手続きが、効果がない者を含みうる手続きとなっている可能性については否定できず、本研究の限界と考えている。

2 公開審査会で出された修正要求の概要

- 2.1 博士学位論文に対して、以下の修正要求が出された。

- 2.1.1 全般性の社交不安の生起要因としての気質的特徴などを扱った先行研究の知見を踏まえた考察を加筆すること。
- 2.1.2 WRTの介入効果を検討する際、脱フュージョンの操作チェック基準を設けずに、各群のサンプルをそのまま比較することによって、従来の技法に加えてWRTを加えることの増分効果を検討するような分析デザインでデータを再分析すること。

- 2.2 修正要求の各項目について、本論文最終版では以下の通りの修正が施され、修正要求を満たしていると判断された。
- 2.2.1 本研究で得られた知見と、全般性の社交不安における気質的特徴などの従来の理解を記述した先行研究との異同に関して、第8章に加筆した。
- 2.2.2 第6章、および第7章において、脱フュージョンもしくは消去の操作チェック基準の設定をなくした。それに伴って、分析デザインを変更してデータの再分析を行ない、分析結果、考察を加筆、修正した（結論は修正前と同様であった）。

3 本論文の評価

- 3.1 本論文の研究目的の明確性・妥当性：本研究は、恐怖および不安症状に対するこれまでの理論的枠組みでは十分に記述できなかった「直接体験に基づかない恐怖反応の拡大（恐怖反応の象徴的般化）」に着目し、その機序を関係フレーム理論の観点から検討し、介入技法を立案することを目的として明確に設定している。この目的は、これまで十分ではないとされてきた恐怖および不安症状に対する介入効果の向上に向けた基礎的知見として寄与するという点からも、臨床心理学研究として妥当なものであると判断できる。
- 3.2 本論文の方法論（研究計画・分析方法等）の明確性・妥当性：本研究は、明確な心理学的実験デザインを設定し、データ収集を行なった。また、得られたデータについては、最終的には、恐怖反応の象徴的般化を示す状態像に対して、従来の中核的な介入手続きであるエクスポージャーに加えて、関係フレーム理論に基づく介入技法（WRT）を加えることの増分効果について解析を行ない、一定の結論を得た。したがって、本研究の方法論は妥当な方法であると判断された。なお、本博士学位論文の内容を構成する研究は、早稲田大学「人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認（承認番号：2009-123；2011-145；2012-256；2014-281；2015-067）を得ている。
- 3.3 本論文の成果の明確性・妥当性：本研究の成果は、恐怖反応の象徴的般化を示す状態像のひとつである「全般性の社交不安」が、関係フレーム理論の立場から記述可能であること、そして、全般性の社交不安に対しては、従来用いられてきた介入技法であるエクスポージャーに加えて、関係フレーム理論に基づく介入技法（WRT）を実施することが有効であるという明確な結果としてまとめられている。これらの知見は、先行研究と照らし合わせて、恐怖反応の象徴的般化を説明する新たな理論的枠組みとして妥当であると判断できる。
- 3.4 本論文の独創性・新規性：本論文は、以下の点において独創的である。
- 3.4.1 恐怖や不安の拡大の記述を試みた臨床心理学的研究においては、恐怖や不安の拡大に直接的な恐怖体験の存在を前提とする「二要因理論」に基づいた説明が主になされてきた。それに対して、本研究は、二要因理論では記述が困難である「恐怖反応の象徴的般化」に着目し、「関係フレーム理論」という理論的枠組みから新たな介入技法を立案したという点で独創性を有すると考えられる。
- 3.4.2 本研究において「恐怖反応の象徴的般化」のアセスメントに用いられた認知課題

は、これまで認知心理学領域の研究における実験パラダイムとして検討されてきた手法である。本研究では、この手法を臨床心理学領域の研究に応用した点において、これまでにない新たなアセスメントの方法論を提案したといえる。

3.5 本論文の学術的意義・社会的意義：本論文は以下の点において学術的・社会的意義がある。

3.5.1 本研究は、これまでの理論的枠組みでは十分に記述ができなかった「恐怖反応の象徴的般化」に対して、関係フレーム理論という新たな枠組みから記述を試み、理論的な説明力を向上させたという点において、学術的意義が高いといえる。

3.5.2 本研究で得られた知見が、臨床心理学分野における全般性の社交不安といった認知行動療法的な援助技法の介入効果が低い者に対する支援に応用されることによって、不安症に対する援助技法の介入効果を高めることに貢献できるという点において、社会的意義があると考えられる。

3.6 本論文の人間科学に対する貢献：本論文は、以下の点において、人間科学に対する貢献がある。

3.6.1 恐怖や不安は、人間が抱えるさまざまな社会的問題の背景要因となることが多いため、これらのメカニズムの解明と介入技法の立案は、人間科学が取り組むべき重要なテーマのひとつであると考えられる。本研究は、これまでの理論的枠組みでは記述が困難であった「恐怖反応の象徴的般化」に着目し、新たな理論的立場から実証する枠組みを提供した点は、大きな意義があるといえる。

3.6.2 本研究では、恐怖や不安の症状を多面的に理解するため、主観指標、反応時間や回避行動などの行動指標、皮膚伝導水準や瞬時心拍率などの生理学的指標など、多様な指標を用いている。これらの指標を用いて得られた本研究の知見は、近接の学問領域での研究データとの相互理解を可能とすると考えられる。

4 本論文の内容（一部を含む）が掲載された主な学術論文・業績は、以下のとおりである。

- ・佐藤友哉，橋本壘，嶋田洋徳，大月友：2015 社交不安のサブタイプにおける関係フレームづけの流暢性と生理的反応の差異—関係フレーム理論からの検討—．行動医学研究（日本行動医学会），21巻2号，91-98頁．
- ・佐藤友哉，橋本壘，前田駿太，山下歩，嶋田洋徳，大月友：2015 異なる言語刺激を用いた脱フュージョン方略および言語刺激に対する曝露が不安症状に与える効果の差異の検討．行動医学研究（日本行動医学会），21巻2号，99-108頁．

5 結論

以上に鑑みて、申請者は、博士（人間科学）の学位を授与するに十分値するものと認める。

以 上